

外交問題、日本語の乱れ等々、教育現場から世の中の動きを見てみると、次世代の日本を迷走させないため、日本人としてのアイデンティティを確立する教育を行うことが急務と感ずる。

明治期、押し寄せる西洋文化の中、内村鑑三はキリスト教を受容する一方、日本の長所を世界に知らせるため『代表的日本人』を著した。この「異文化を受容する柔軟性」と「日本人としての軸」の両方を伝えること、それが真の国際教育ではないか。

あるときこんな苦情を頂いた。「電車内で生徒に注意をしたら、『日本人っていやね、イギリスでは』と友人にさざやいているのが耳に入った。どういふ教育しているのか」という内容だった。顔から火が出る思いだった。10年以上前の話である。国

品川女子学院校長 漆紫穂子



際教育がブームで、多くの学校で国際科が設置され、校名まで〇〇国際と変更されるような時代だった。本校も将来

うるし・しほ(東京市内の私立中から父が理事長を務める品川女子学院中高に移り、国語教諭、副校長を経て4月から現職。文部科学省新教育システム開発プログラム委員。

本の伝統文化の授業を行って、5月には田植え、7月には新潟県上越市で民泊をした。都会暮らしの子供たちには、わらじを編みつつ、稲の莖一本無駄にしない昔の人の知恵に目を丸くしていた。

「国」あつての「国際」だ

の「国際人」を育てるべく、英語教育に力を入れ、海外研修を充実させ、それが軌道に乗ったころだった。「インタナショナル」の前に「ナショナル」のない教育ではだめだと強く感じた。

現在、私たちの学校では「日本を知る」を教育の1つの柱にし、茶道、華道など日

の文化を自分のものにして、その上で広い視野を持った人になりたい」

帰りの道、たまたま開いた本のページから「日本人」という小見出しが目飛び込んできた。「平成」の元号の名付け親とされる安岡正篤の言葉だった。要約すると、「ナショナルイズムが排他的民族主義になるのはいけないが、ナショナルリティは大事。これがないと世界性、国際性、宇宙性が出てこない。日本人は日本の個性がある。どこまでも日本人でなければ世界市民になれない」というものだった。

教育

次回は28日掲載